
dream or reality

海鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dream or reality

【Zマーク】

Z7100A

【作者名】

海鳴

【あらすじ】

ある雪の日、いつも通り会社に行き、いつも通り帰ってきたマサキの身に不思議な現象が・・・

「マサキ。マサキ？」

彼女の柔らかい声が聞こえる。

そうか、もう朝か。オレは寝てしまっていたんだ……。

昨夜、帰ってきたのは1時頃。

暗くて何も見えない家の 中を歩くと、何だかわからない柔らかいものがつま先に触れた。

思わず驚いて足を引っ込んだが、それが生きているのか動かないのか解らない以上はつまんで避けることもできない。

明かりを点けようと手を伸ばした。

『力チ、力チ。』

手探りで紐を引くとパツと明るくなる。

足元に触ったのはカバンだった。

オレの？ではない。彼女のものようだ。

落ちていたかばんと持っていたカバンをまとめてテーブルの上に投げて、ソファに倒れこんだ。

それにしても今日は忙しかった。

朝早くから出かけたのに40分で着くはずの会社に着いたのは2時間も後。

どれもこれも、昨日の夜に降った雪のせいだ。

動かない電車を駅で待った。今の状況を連絡するため、会社に電話をした。

時間を持て余し、久しぶりに小説を買った。

街で話題になつたものでも、好きな作家のものでもなかつたが面白

く、気に入った。

一通り読み終ると、やつと電車が到着。

それからも何度も電車は止まり、やつと会社に着いたのはいいが、人が少なくて仕事にならない。

外はまた雪だ。こんなに寒いのに暖房が停止している。

聞くと、壊れているという。

売店でカイロを見つけて懐に入れる。

そんなことをやつていううちに昼休憩になってしまった。

外に出る気はしなかつたので社食で済ませ、机に戻る。

今朝、買つたばかりの小説を取り出して最後の5ページほどを読んだ。

「珍しいな。」

同僚の一人が話しかけてきていたようだが聞こえない振りをした。

今はこれに集中してみたい。物語の心地よさに浸つてみたい。

読み終えた頃に休憩の終わりを告げるベルが鳴った。すつきりとした気分で仕事ができた。

帰りには雪も凍り、足元の滑る中、家に帰った。

家の中は珍しく散らかっていて、彼女が疲れていることを現していた。

近所の雪かきを手伝うとか言つていたつけ。

あとからあとから降つてくる雪を片付けるのは大変だつただろう。着ていたスーツをハンガーにかけて、シャツを洗濯機に放り込んだ。リビングに落ちていた服もついでに入れて、自分で料理をした。夜食を食べて、お風呂に入り、リビングに戻ると窓の向こうに雪がちらついていた。

「まだ降るのか・・・。」

先刻使つた食器を洗おうと思い、キッチンへ行くと彼女が起きていた。

食器を洗っている。

「起こしたか？悪いな。」

冷蔵庫からビールを取り出し、彼女の手元に置いた。

「何言つてるの？ずっと起きてたじゃない。」

クスクスと彼女は笑つた。

彼女は寝る前に本を読む癖がある。推理小説なんかを読み始めると2時間は寝ない。

「そうか。」

気が付かなかつた、と思いながらソファに腰掛ける。ビールを一口、一口飲んで、テレビをつけた。

この時間は何をやつているだろう。

「今、何時だ？」

遠くの彼女に声をかけた。

「10時半くらいじゃないかしら。」

チャンネルを変える。確かにそうだが、何かおかしい。

オレが帰つてきたのは1時だ。昼ではない。夜中の。

風呂に入る前までは2時より少し前くらいだったはずだ。帰つてから一度きりしか時計を見ていない。確信がなかつた。だが、戻つているだなんて・・・・そんなこと・・・・。テーブルの上を見ると、先刻置いたはずのカバンがない。

「カバンは・・・片付けたのか？」

「ええ？」

彼女が笑いながらオレの隣に座つた。

「お気に入りのカバンが昨日壊れちゃつたから、明日買ひ予定だつて言つたでしょ？」

「でも、それは昨日の話だ。」

「そうよ。昨日壊れちゃつたの。今日はお客様がきたから・・・。明日行くわ。」

テレビから臨時ニュースが入つた音がする。

「大雪で電車が動かないんですって。明日のお仕事は？大丈夫かし

ら？」

そんな彼女の言葉は、オレの耳に入つてなかつた。
このテレビは昨日、一人で見たはずだ。

たつた今入つた臨時ニュースも昨日のものだ。

「具合でも悪いの？顔が真つ青。」

彼女が心配そうにオレの顔を覗き込んだ。

「いや、大丈夫だ。」

大丈夫ではないかも知れない。そう思った。

「でも、顔色が悪いわよ。今日はもう眠つたら？」

心配そうに微笑む目の前の顔を直視できない。

彼女はこのあと、とても重大なことを言つんだ。

「何か、オレに言いたいことがあるんじゃないかな？」

彼女の表情が固まつた。

そうだ。彼女が言いかけた言葉を明日の仕事の心配をしていたオレ
は聞いていなくて・・・

「わかつちやつた？ そうなの。実はね・・・。」

怒つた彼女は雪の中を裸足で走つていく。

当然、追いかけたオレが次に見たものは・・・飛び散る血と・・・

・・血の中に沈む彼女の姿。

「う・・・・・うわああああ！――！」

「マサキ。マサキ？」

愛する妻の柔らかい声がする。

ああ、オレはいつの間にか眠つてしまつたんだ。

先刻まで見ていたあれは夢だつた。

時間が戻つてしまつてあるわけないじやないか。

「よか・・・・・つた・・・・・。」

彼女が泣いてる。

「どうか・・・・・したのか？」

目を開けると真つ白な天井と、白いベッド。

泣き腫らした手を手で覆い隠すよつとしてオレを上から覗き込む彼女。

「死んじゃつたら・・・・・びつじょつて・・・・。」

オレは彼女を追いかけて走った。上着も着ずに、ひたすら走った。右に折れた彼女を追いかけてオレも右に曲がった瞬間。

飛び散る血。死ぬほどのかく。彼女の悲鳴。

そうか。あの時事故にあったのはオレだった。

あの時から今までの出来事が全部夢だったんだ。

「あ、マサキがリビングのテーブルに置いてた本。持つて来たから暇だつたら読んでね。」

そこにはあつたのは、あの口駅で買った・・・・・。

I s t h i s a d r e a m o r a r e a l i t y?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7100a/>

dream or reality

2010年10月10日04時51分発行